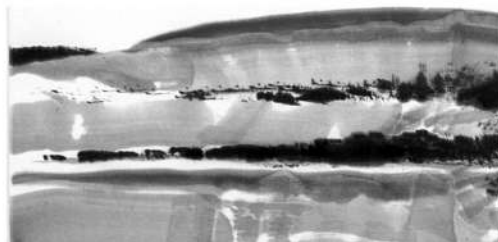
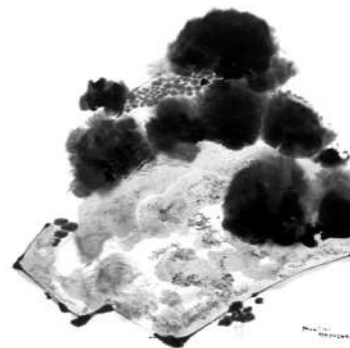
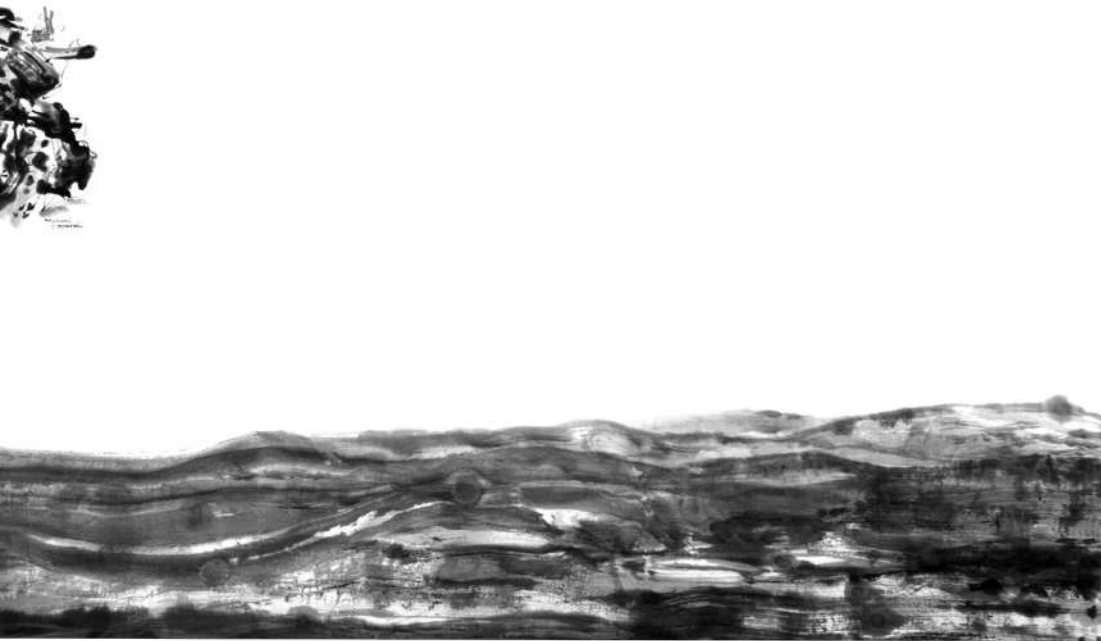
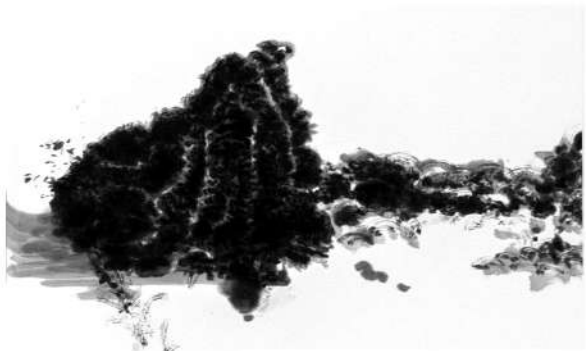


なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」ドキュメント2025

Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex Artist In Residence Documents 2025





本年度で4年目となる「なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業『文化村AIR』」に、今回も全国から多数のご応募をいただきました。奈良に魅力を感じてくださるアーティストの方々が多くいらっしゃることを大変嬉しく思っております。

この事業は、地域の人々がアーティストの作品と触れ合い交流することで、アートが社会をつなぐプラットフォームになると共に、文化芸術に関心を高めることを目的に、滞在するアーティストと地域の人々が双方向で価値ある出会いになることを目指しています。滞在中、アーティストは文化村を拠点に、奈良の歴史・自然・文化に触れ、地域の人々と対話や交流を行いながら、作品制作やワークショップ、発表などの活動を行います。

本年度、多くの応募者の中から選ばれた早崎真奈美氏は、自然科学や生物の生態系に人間がどのような眼差しを向けてきたかということに関心を持っています。主な手法は黒い紙を用いた切り絵のインスタレーションですが、近年は墨によるドローイングも取り入れています。奈良の地に日本文化の精神性の根源を感じ、文化的風景をリサーチして、過去と現在、自然と人工など重な

り合う時間や人々の営みに触れながら創作活動に取り組んでいました。その過程で生まれた思考や対話、実践の軌跡は、完成した作品だけでなく、制作に至る時間そのものに豊かな意味を与えていたように感じます。

本記録集は、そのような活動の過程をまとめたものです。この記録集を読んでいただくことで、早崎氏の活動の歩みを共有し、読む方それぞれの視点から新たな発見や想像を促す一助となれば幸いです。

本事業に関心を寄せ、ご応募いただいた全てのアーティストの皆さまに感謝申し上げるとともに、事業の実施にあたり、多大なるご理解とご協力を賜りました関係者の皆さま、地域の皆さまに、心より御礼申し上げます。

今後も、なら歴史芸術文化村が、多くの方々の創造と交流の場として開かれた存在であり続けることを願い、本書の刊行に寄せる挨拶といたします。

なら歴史芸術文化村
滞在アーティスト誘致交流事業 実行委員会

目次	なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」2025 事業概要	04
	成果発表展「Flux in Black 昨日の黒：早崎真奈美」	06
	滞在日記	33
	インタビュー	52
	アーティストプロフィール	59
	墨の記憶 渡辺亜由美	60
	審査委員による展覧会講評	64
	募集要項	67
	なら歴史芸術文化村について	70

令和7年度 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」事業概要

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」(以下、「文化村AIR」)は、全国からアーティストを公募・選定し、一定期間、なら歴史芸術文化村に滞在しながらリサーチ、制作、成果発表を行うアーティスト・イン・レジデンス事業です。本事業は、天理市において平成30年度より継続されてきたアーティスト誘致事業を基盤とし、令和4年の開村を機にその取組を継承・発展させながら、土地と人、アートと社会をつなぐ取組を行っています。

令和7年度の「文化村AIR」では、早崎真奈美氏を迎え、奈良の風土や歴史、人の営みが重なり合う地域性に着目した滞在制作を行いました。自然科学や生態系に対する人間の眼差しを起点に、「生と死」「善と悪」といった二元性を通して人間の本質を探究する視点は、本滞在制作の思考基盤となりました。

滞在中は、古墳や山辺の道を中心にフィールドリサーチを行い、奈良の地形や歴史的環境に根ざした制作に取り組みました。歩くことや観察、記録といった身体的な実践を通して、自然と人工、過去と現在が交差する場所に残された人間の痕跡を作品として展開しました。

制作過程では、墨を扱う専門家や発掘調査に携わる研究者、地域住民との対話を重ね、その知見を制作に反映させました。黒い紙を用いた切り絵のインスタレーションや墨によるドローイングを用い、時間や記憶の境界が揺らぐ感覚を視覚化しました。完成した作品の展示に加え、滞在制作を通して蓄積されたりサーチや制作プロセスを共有することで、県民が芸術文化への理解、新しい価値観や気づきを得る機会を創出し、芸術文化への関心度を上げることに寄与しました。

令和7年度 文化村AIR: 早崎真奈美

[滞在期間]

2025年11月2日～12月24日

[成果発表展]

[Flux in Black 昨日の黒: 早崎真奈美]

2025年12月6日～12月21日

会場: なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ302

[事業にご協力いただいた皆様] (50音順)

錦光園 / 株式会社呉竹 / 桜井市観光ボランティアガイドの会
桜井市立初瀬小学校 / 天理大学附属天理参考館

[主催]

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市)

「なら歴史芸術文化村」のWEBサイトにて

本事業の記録動画を公開しています。



「Flux in Black 昨日の黒」 早崎真奈美

これまで、自然科学や生物の生態系に人間がどのような眼差しを向けてきたかということに関心を持ち、「生と死」「善と悪」などの、対立しているようで切り離せない二元性を通して人間の本質を見つめてきました。科学的に整った体系の中にも矛盾や微細なエラーが潜み、そこに人間特有のエゴや偏見が現れると感じています。切り出した紙片は平面でありながら空間に影を落とし、二次元と三次元のあいだを揺らぐ存在となります。近年は墨によるドローイングも取り入れ、そこに生まれる濃淡を通して境界がにじむ様子、つまり「曖昧さ」や「揺らぎ」を観察し探っています。

奈良は日本文化の精神性の根源を感じる地であり、古墳や山の辺の道など、人の営みと自然が重なり合う景観に強く惹かれます。滞在制作では、そうした文化的風景を自分の足でたどりながら、自然と人工、過去と現在が交差する場所に潜む人間の痕跡を作品として可視化することを試みました。この試みは、歩くこと、描くこと、土地の記憶に触れることを重ねる中で、変化し続けながらも変わらずそこにある、「昨日・今日・明日」が続いていく大きな流れの中に私もいるのだという実感を伴うものになってきました。

墨に現れる滲みと積層は、時系列さえ曖昧にしながら一つになっていきます。変化と持続が同時に起こりうることを「黒」は示してくれるのです。

Flux 昨日の
in Black 黒

MANAMI

HAYASAKI 早崎真奈美

会場 なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ302

会期 2025年12月6日-12月21日



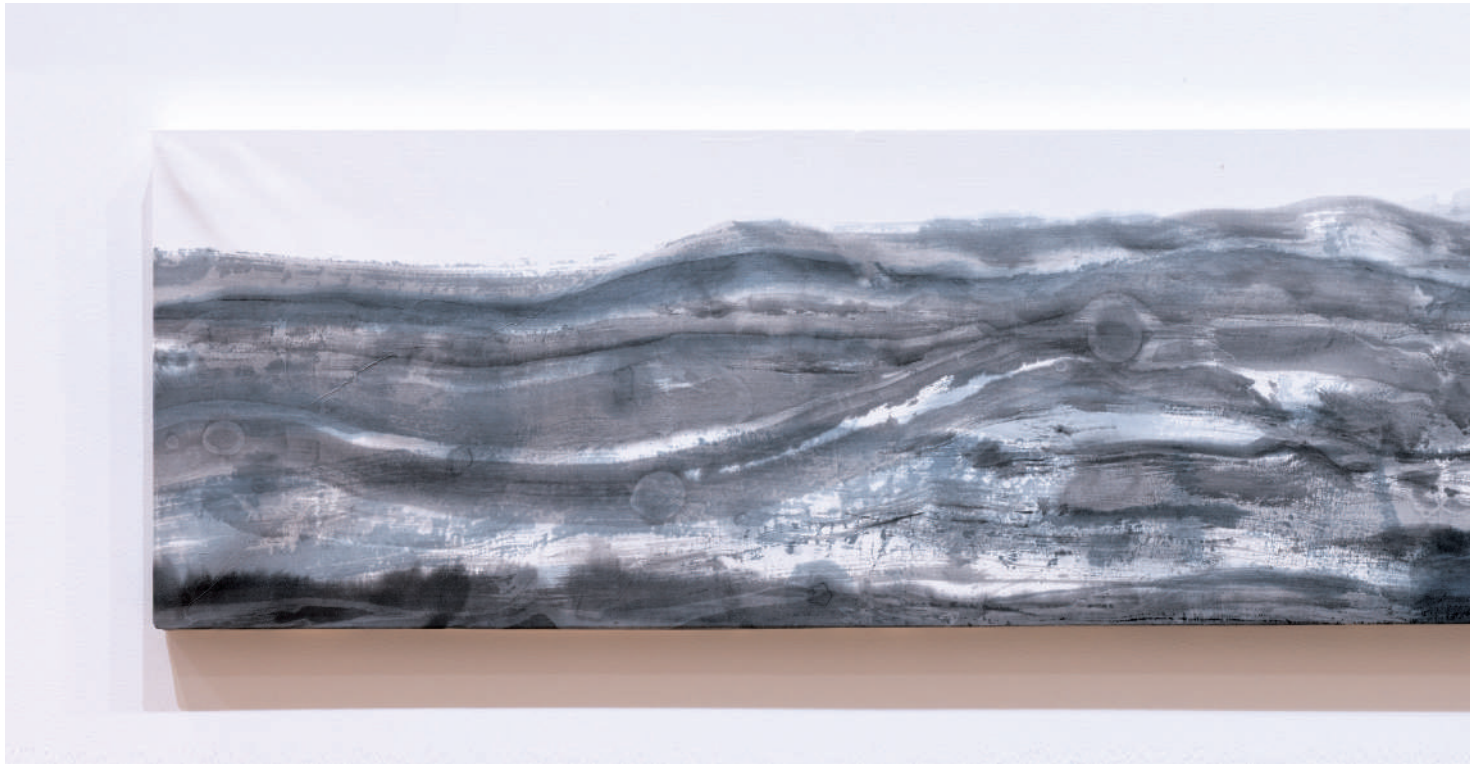


















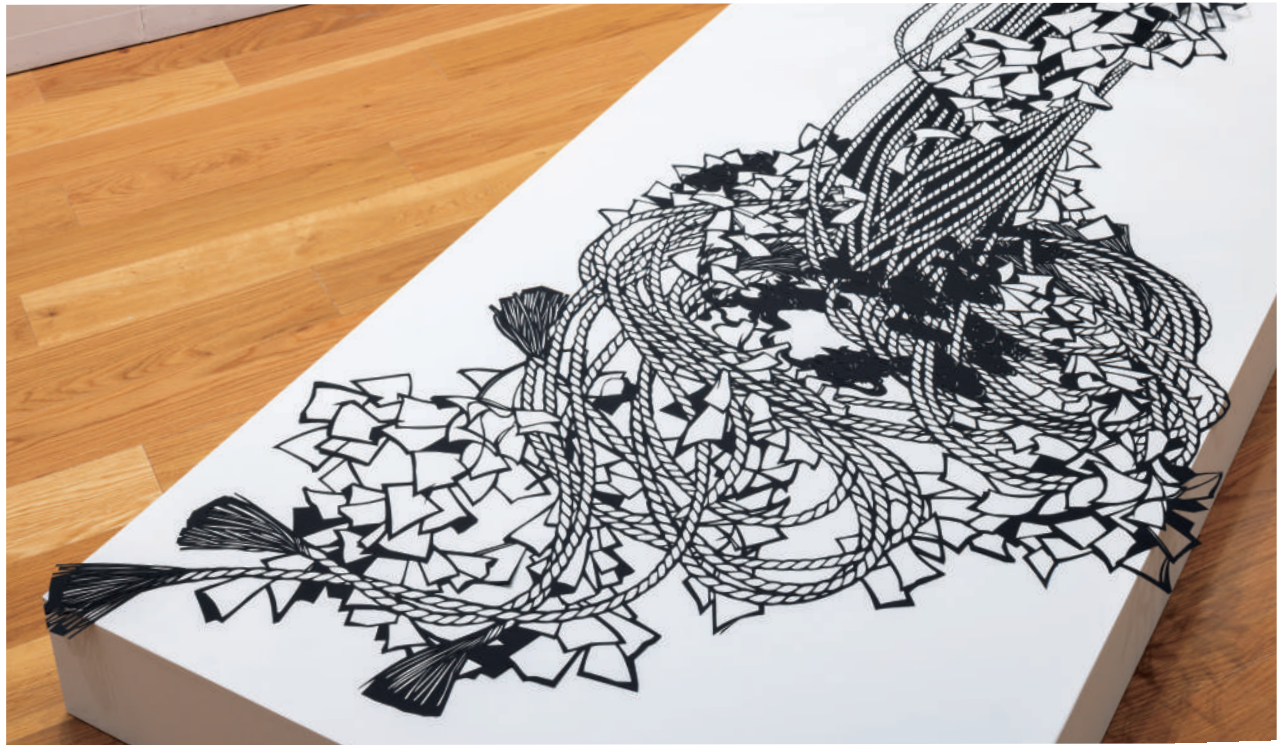




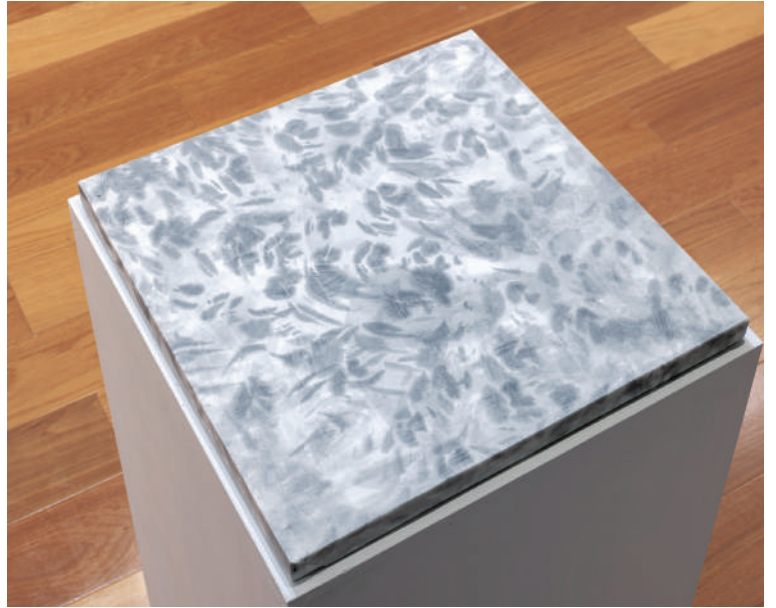






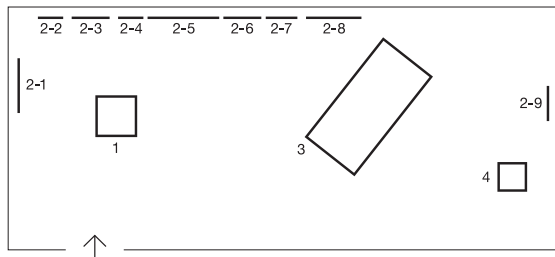








展示作品一覧



1 昨日の黒 p21 Yesterday's Black

2025 楡に奈良墨、不織布ガーゼ、脱脂綿、水、プラスチックコンテナ
2025 Nara Sumi Ink on Wood, nonwovenfabric, cotton wool, plastic container
[コンテナ] 273×360×50mm [木簡] 40×225×3mm

例えば、2000年先の人が、偶然この木簡を見つけた時に、「昨日の黒」は、まったく別の意味に変わるだろう。

今日、膠と混ぜて成形した墨が、使えるようになるまで約2年、一番良い状態になるのに20～50年。100年先も変わらない昨日・今日・明日が、来ることを疑うことのない墨づくり。

1000年前の出来事を、まるで昨日のこのように話す奈良の人々と、東京の忙しさにすっかり呑み込まれていた私との間に、時間認識のバグがたびたび起こる。それが不思議に心地よい。

墨は優秀なメディアウムで、1000年以上残ることが証明されている。ひとまず、保存装置である水の中に木簡を入れてみた。(これは、実際の文化財保存のビジュアルに寄せているが、文化財保存の視点から見れば、ただの水を保存液にするには管理が難しく、ラボによって違いはあるが、ホルマリンやホウ酸ホウ砂を溶かした水などが使われている)

願わくば、このレジデンス期間中に、どこか湿った土の中に埋めておきたい。残るか残らないかは自然に任せて。

2 黒の系譜 Lineages of Black

2-1 黒の系譜：戻された円
p9 Lineages of Black: Returned Circle
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
652×1000×27.5mm

埋め戻す／
発掘調査後、墳頂に木を植えた現代人／
祈りのよう

2-2 黒の系譜：ずれの石
p12 Lineages of Black: Offset Stone
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
333×455×19.5mm

移動する／コロコロ山古墳

2-3 黒の系譜：向こうに
p13 Lineages of Black: Over There
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
530×803×23.5mm

渡す／笹墓／堂後／大池

2-4 黒の系譜：小さな循環
p14 Lineages of Black: Small Cycle
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
333×333×19.5mm

こもりたものを見たら古墳と思え／
柿の枝、積み重ねる

2-5 黒の系譜：流れる地平
p15 Lineages of Black: Flowing Horizon
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
298×1260×19.5mm

道／水／人／時／
つなぐこの地の心象風景／
奈良墨、藍の墨、3つの墨を使用

2-6 黒の系譜：消えない縁
p17 Lineages of Black: Lingering Edge
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
333×532×19.5mm

段丘／眺めながらお弁当

2-7 黒の系譜：太陽を待つ丘
p18 Lineages of Black: A Hill Waiting for the Sun
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
455×455×19.5mm

育てる／チャノキ／西中山古墳

2-8 黒の系譜：近道
p19 Lineages of Black: Shortcut
2025 紙に奈良墨、木製パネル
2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel
500×606×23.5mm

道／通す／ヒエ塚古墳

2-9 黒の系譜：閾(しきい)の光

p28 Lineages of Black: Threshold Light

2025 紙に奈良墨、木製パネル

2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel

333×660×19.5mm

| 振り返る／石室

3 万物流転

p22 Flux

2025 紙

2025 Cut-card

4420×920mm

常に水は流れ続け、滝は一瞬たりとも同じ滝でないにも関わらず、滝であり続ける。

室生寺にある龍を模しているといわれる勸請綱は、だらんと垂れ下がっていて、龍というにはダイナミックな動きがないのでは、という初見の印象だったが、じっくりその形を眺めているうちに、概念としての龍神よりも、滝そのものであると思うようになってきた。

4 痕跡

p27 Tracing

2025 紙に奈良墨、木製パネル

2025 Nara Sumi Ink on Paper, Wood Panel

333×333×19.5mm

墨の輪郭にできる白い筋は、新たに筆を重ねても残る。油絵の具などでは消えてしまうファーストストロークが痕跡として浮き上がる。

紙の上で起きる遠近の逆転、墨の平面性と立体感、西洋美術がリードする現代においての常識を裏切る墨のユニークさに気づきたい。じっくり覗き込んでほしいピース。

飛鳥時代に作られた石室の壁、精密に整えられた石積みは古代のものとは思えないほど。人の手で削られた石肌をなぞるように描く。

滞在日記

(早崎真奈美による日々の記録)

*一部抜粋・編集



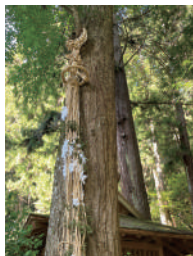
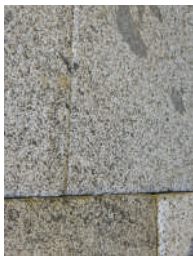
10月6日(月)

新幹線はほぼ満席。隣の女性二人組からスマホを片手に話しかけられる。画面には「富士山が見えるときに教えてほしい」。私は、富士山はもう通り過ぎていること、私たちが座っているのは富士山とは反対側であること、そして夏の天気では富士山は見えないことを伝える。がっかりした様子。カリフォルニアから来て、京都で数日過ごすらしい。着物に興味があるというので西陣を紹介した。さらさも紹介したら「混んでないか?」と聞かれた。京都はどこも混んでいると答えると、もう人混みはうんざり、という様子だった。私は奈良に向かうと伝えると「鹿でしょ?」と興味はない様子。「私が行くのは古代の都市で京都よりもずっと古い。奈良駅付近よりも古い。静かで歴史と自然があって混んでない。」と言うと、「そういう場所に行きたい!京都から日帰りで行けないか検討してみる。」と。パイリンガル表記の桜井のパンフレットがあったので渡し、京都で別れた。収穫前の田んぼと瓦屋根の風景を眺めながら13:00天理駅着、AIRの担当者・北村さんの案内で商店街を歩く。時間の感覚がゆっくりになっていく。商店街のトンネルを抜ける頃にはアジャストするように。民泊ふることに到着。オーナーご夫婦は、桜井と歴史が好きで移住してきた方々。観光ガイドタクシーの経験もあり、初日から周辺の古墳や歴史の話で盛り上がる。こんなにたくさんのすごいものが残っているのに、知らないことばかり。ロンドンの街にローマ人が築いた壁やコロッセオ跡が残っていることを知った時のことを思い出す。足元に積まれ埋もれているもの。「埋もれる」という言葉、よくできてるな。



10月7日(火) 安倍文殊院、文殊院西古墳、文殊院東古墳、安倍寺跡、大野寺磨崖仏、室生寺、等廻神社

安倍文殊院は、阿倍氏の氏寺である安倍寺が由来ということで、気にはなっていた。と言うのも、2023年の中之条ビエンナーレ(群馬県)でモチーフとした自莢(サイカチ)と言う植物を、展示発表後も続けてリサーチしていたところ、2025年の春に、自莢町と言う地名が京都にあることを知り、訪れてみると一条戻り橋に非常に近いところに位置することがわかったからである。一条戻り橋は、「この世とあの世を結ぶ



橋」と呼ばれることがある。安倍晴明伝説で、式神を住まわせていた場所とも云われる。『日本歴史地名大系第二七巻・京都市の地名』によると、自莢町の地名は、昔この地にサイカチの大樹があったことに由来するらしい。また戻り橋について「応仁の乱の前の景観では戻り橋は一条より一町(約100m)南」とある。これを踏まえると自莢町は戻り橋と今よりも近い位置にあり、また、大内裏の鬼門避けであった可能性も高くなる。中之条以外で見えてこなかった鬼門避けと言う役割が、京都の街で浮かび上がり、また、安倍晴明という強いワードが出てきたことで急激に、サイカチにまつわる魔除けの俗信のルーツに近づいたように感じた。サイカチの木が魔除けの俗信と共に東北に多く残っていることもまた、安倍氏の支流である奥州安倍氏のルートと関連することもあるかもしれないが、こちらはまだ十分に調べることができていない。自莢という不思議な漢字から調べると、「七姓漢人」が出てきた。『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』によると応神天皇の時代に阿知使主(あちのおみ)とともに帰化した、漢人(朱・李・多・自郭・自・段・高)であるらしい。他で使われているのを見たことがない「自」の字が姓として二つも出てきたことに驚いた。『坂上系図』では『新撰姓氏録』を引用し、「自郭 - 坂合部首、佐大首の祖。自 - 大和国宇太郡佐波多村主、長幡部の祖」と説明しているらしい。専門家の見解をちゃんと聞いた訳ではないので、都合の良い解釈ではあるが、自郭を祖とする坂合部氏は、尾張系、安倍氏系とも推測されるとする書物もあることから、平安京のサイカチ、奥州のサイカチ共に、「自郭氏が持ってきた豆の莢、自莢(サイカチ)」として、安倍氏を経由して代々伝えられたと考えることができるかもしれない。

安倍文殊院の見どころと言えば、快慶作の文殊菩薩と脇侍像。期待以上の迫力。民泊ふることのご主人が前日に解説してくれた文殊院西古墳へ。精巧な切り出しの石積み。左右対称の見栄えをそろえるために大きい石には溝が掘られている。阿倍倉梯麻呂の墓と伝えられている。安倍寺跡は草むらになっていた。この日桜井は30℃の夏日。少しの涼しさを求めて室生寺へ向かう。磨崖仏のある場所は、大きく川が曲がる場所で、自然にできた崖に掘られた仏が、開けた対岸に見える。室生寺では、銀杏の木にかけられ



たしめ縄に目がいった。上の方の枝に小さな輪があり、そこから長く細い縄の束が垂れ下がって、根元近くでぐるりと幹に巻きついている。特に説明書はなかったが、龍穴神社にも同様のものがあるらしく、龍をかたどっているらしい。桜井から室生寺まで、ずっと初瀬川、宇陀川と川沿いを登ってきた。蛇行する姿はまさに龍、または蛇のようである。奥の院まで行って、リサーチ初日から脚がぶるぶるする。

帰りに桜井の等彌神社へ立ち寄る。宮司が海外からの来訪者に英語でお参りの作法を教えていた。その後、来訪者を見送った宮司とその同級生という男性と少し会話をした。神社は祭りの準備をしているようだった。近々祭りがあるらしい。宮司の同級生は「この神社には宇宙人がいた証拠の像が出土している」と言った。「絶対宇宙人。間違いない」と数回念押しした。そして、ここの鳥居は、伊勢神宮の式年遷宮の際、いただいたものらしい。このことは等彌神社の格式を示しているとその人は教えてくれた。



10月8日(水) 9:50巻向駅、纏向遺跡、箸墓古墳、ホケノ山古墳(昼食)、松原神社、玄寶庵、狹井神社、くすり道、大神神社

駅でガイドの西林さんと合流し、どんなことを知りたいか聞かれ、サイカチの起源をヤマトにやってきた渡来人である仮説を立てている話をしてみると、「ここは地元なんやけど、年寄りが豆の莢をむく作業のことを"まめかち"と呼んでいる。」と教えてくれた。いわゆる方言、もしくは昔言葉と言えるかと思うが、「皂、もしくは皂郭氏の豆莢」という意味である根拠を知ることができた。幸先良い。曾大根のサイカチ(大和高田市)は少し地域が違うので、また自分で足を伸ばしてみる必要があるようだ。

纏向遺跡へ。雇用促進、公営団地の建て替えをきっかけに遺構が見つかった。纏向遺跡は邪馬台国説がある。時代は確かにあっているが、文献と合うような構造物の跡が見つかっていないらしい。ここで見つかった弥生時代の遺構は東を背に建っている。規模的にも、祭祀に使った建物や穀物庫なのではないかということだった。これは、通常神社がその方角に建っていることに繋がる。ちなみに中国に倣った都造りは「天子南面す」という思想に基づいている。

箸墓古墳をリクエストしたのは、大型前方後円墳としては最古級のものだと思ったからだ。第7代孝霊天皇の皇女・倭迹迹日百襲姫命(やまとととひもそひめのみこと)の墓とされる。ととひもそひめ。その弟は吉備津彦命(きびつひこのみこと)で、吉備で鬼ノ城の悪人を退治し、桃太郎のモデルになったと言われている。西林さんが言うには、悪人とは「悪い渡来人」とのこと。良い渡来人と悪い渡来人がいるのか。ここには吉備地方とのゆかりがある出土品もあるようだった。西林さんからは、卑弥呼の墓とするには難しいのではないかとする根拠の資料を見せていただき解説してもらった。そして、明治9年の箸墓古墳の写真を見せてもらった。そこには今の木々が生い茂った様子とは全く違う姿があった。箸墓古墳は明治政府以降、宮内庁の管轄下で、古墳を守る目的で杉などが植林されたという。その後定期的に宮内庁が調査に入っているはずだが、明治9年の写真でははっきりと段築が確認できる。一番高い位置に祠らしきもの、杜のようなものがあったようだ。参拝用の道がはっきりと見える。管理されることで、草木が覆い茂るのか。「ただの森」に見えがちな古墳の姿は、本来宮内庁が意図した管理下に収まらず暴発した野生を感じた。一方、民間人の手が入る、キワの際では、古墳と水田の境目のラインが浮かび上がり、指でなぞりたいようなくびれを描いていた。逢坂山からパケツリレー式に石を運び、夜には神様がつくったという伝説がある。実際には、土師氏が古墳の築墓を指揮した。埴輪などを作るのも土師氏の仕事で、箸墓の段竹の高低差は、現代の土木技術につながっているという。その後、ホケノ山古墳で昼食を取り、古墳の上に登る。前方後円墳はその向きがランダムであることの原因がわからなかったため西林さんに尋ねた。海からやってくる来客に対し、権力を誇示するためによく見える位置につくられたとする説がある。それは、大仙陵古墳を基にした考え方だという。大仙陵古墳に関してはその側面があると言えるが、基本的には地形に合わせて築墓されていること、住居エリアとは離れていたはずという。古代人も現代人も、死に対し忌み畏れる気持ちは2000年経っても変わらない。また、古墳の方向と、石室の方向は揃わない。石室は必ず北枕につくられているという。ホケノ山古墳は古墳時代を目前にした弥生





時代の前方後円墳。南北に配された石囲い木柵は朱に塗られていた。また、弥生時代の特徴として鏡を細かく砕いて散らすそう。葺石が見つまっている。葺石に使われるのはだいたい丸い川の石だそう。箸中の長者屋敷や箸墓の昔話を聞きながら、桧原神社へ。拝殿のない神社。名前の通り、桧の原っぱであったという。山辺の道に入り、玄賓庵へ。不動明王などを近くで拝観する。狹井神社ではくすり水を飲む。ここから大神神社に向かう道が「くすり道」となっており製薬会社の寄進で生薬関連の樹木が植えられている。棘に覆われたサイカチの木もそこにあった。この道は平成に作られている。もはや、日本人の生活からは忘れ去られているのではないかと思っていたサイカチが、生薬の世界では現役であることに、驚く。



10月9日(木) 飛鳥、牽牛子塚古墳、高松塚古墳壁画修復見学、キトラ古墳玄武特別公開、菖蒲池古墳、飛鳥寺、男綱、棚田、桜井市長表敬訪問

宿のご主人・大森さんに西岡常一棟梁の話を書く。私も小学校の教科書で読んだ西岡さんの文章にひどく影響を受けたことがあるので、改めて数々のエピソードを楽しく拝聴する。弟子の話、槍カンナの話、薬師寺の塔の話。

牽牛子塚古墳の見晴らし、八角形は天皇の墓の特徴。高松塚古墳の壁画修復では、線描きは墨、赤は水銀朱、青と緑は国外から持ち込まれたと考えられているとのこと。黄色はまだ素材がわかっていない。菖蒲池古墳は、草がぼうぼう。家形の石棺が特徴。蘇我蝦夷入鹿の墓説がある。飛鳥大仏を拝観、棚田の風景。男綱に異世界を感じる。

桜井市長へ表敬訪問、その後事務局長の尾田さんから周辺景色の案内をいただく。三輪山は少し前よりもっとこんもりした稜線だったらしい。松食い虫の被害で、スカスカした見た目になってきたらしい。

桜井最後の夜なので、近くのお好み焼き屋さんへ。常連さんたちが優しくしてくれる。談山神社のおみやげの屋で働いているというNさんという女性が「お米に色塗っているやつ、こうやってこうやって渡すねん。嘉吉祭って12日にあるんよ」と教えてくれた。みんな優しくかった。ふることでは、初めてポर्टフォリオを見せる。自分の作品を見せずに歴史や遺跡の話ばかりしてたんだな。





10月11日(土)

午前中にこれまでのリサーチの記録。午後は、奈良県文化財保存事務所主催の中造園さんを講師に迎えた石積み体験に参加。サイカチをモチーフにした作品を設置。イオンに行く途中に彩雲。アーティストの友人が、「虹は太陽を背にした時に見える」と以前教えてくれたことを思い出す。彩雲は太陽のそばに見えるんだな。夜、天理の花火が上がる。奈良に来てから方角の話ばかりしている。



10月12日(日) 談山神社(嘉吉祭)、聖林寺

10時過ぎに談山神社に到着、お土産物屋のNさんに一声かけて、祭礼を見学する。ちょうど、お供えが終わったところだった様子。宮司さんが祝詞を献上する時は、見学者は畳すれすれまで頭を下げる。雅楽のレベルが高い。多分。最後、お供物は祠から拝殿へ。参列者が一列になり、手渡していく。西林さんが教えてくれた箸墓古墳が造られた時の様子を思い出す。山の人が多武峰の秋の収穫物をととのえて供えた神饌を「百味の御食」というらしい。ユニークな造形で、可愛い。3日間ぐらいで氏子さんが作ったそう。手描きの設計図があるらしい。彩色されたお米の御食は一段42粒で約2000粒使われているそう。色の変わりやすい野菜は、今朝氏子さんが畑で収穫して、ぶすっと刺したそう。以上、他の人の会話を盗み聞いた。蹴鞠の掛け軸が展示されていた。そういえばNさんが蹴鞠の行事もあると言っていたのを思い出す。神廟拝所は羅漢と天女の壁画が迫力あり。Nさんはきつねくずうどんをご馳走してくれた上に談山神社の地酒をお土産にくれた。焦ってセルフィーしたら変な写真になった。嘉吉祭を教えてくれたお礼が言えて良かった!お店は嘉吉祭の影響か、忙しそうだった。秋にはもっと忙しくなるらしい。一つ下のバス停まで歩いていたらうっかりバスに抜かれてしまった。次のバスが1時間後なので、待つのはやめて、その1時間で聖林寺まで歩くことにした。ずっとネットワーク圏外。こちらの十一面観音像は廃仏毀釈を逃れて隠され、後に岡倉天心とフェノロサが評価したものだという。ガラスケースに入っていて、近くで拝観できる。





1時間後のバスに乗り、桜井駅では30分電車を待った。文化村職員の松長さんが3階に来ていたので、ついでに作品を見てもらった。サイカチや墨の話をして、ボードゲームの話にもなった。奈良のゲーム「かりうち」を教えてもらった。絶対記念に買って帰ろう。ぜんそくの薬を持ってくるのを忘れてしまった。季節性の咳が出る。



10月13日(月) Time Travel Walk: 西山古墳→石上神宮→内山永久寺跡→観光農園(昼食)

内山永久寺が失われた話は、歴史好きが明治政府を苦々しく思うのも無理はないと思える話だった。参加人数が多く、どうしてもガイドの声が届かないことがあったので、15日のふるまつりの日にまた色々聞いてみたい。



10月15日(水) ふるまつり(天理市)、コフニア、萱生環濠集落、西殿塚古墳、燈籠山古墳、中山大塚古墳、行燈山古墳、天理市黒塚古墳展示館、天理大学附属天理参考館 産業振興課・東さんの案内で、ふるまつりと周辺を案内いただいた。

コフニアは、古墳に泊まれる宿泊施設、古墳に登ることもでき、立派な蔵付きの瓦屋根の家々が建つ環濠を持つ集落、古墳の段築を活用した果樹園が見えた。燈籠山古墳は古墳の上に近代的な墓が密集して建てられている。生活と古墳が共にある様子が見てとれた。中山大塚古墳も登ることができた。一度発掘調査があり、その後埋められているという。石室があった場所に低木が植樹されており、その周辺を囲うように別の木が植えられていた。モニュメント的な意味合いなのか、古墳を守る意味なのか、現代人の考えも聞いてみたいと思った。



ふるまつりは伝統的な渡りの行事。平安時代からの大事な例祭でありながら、道中見守る人と、参列する人たちとの親しげな声の掛け合いが見られ、日常と大きな隔たりのない、生活の一部にこのまつりがあるように感じられた。それは格式のある、荘厳な祭りに違いないと予想していた自分にとっては新鮮な驚き



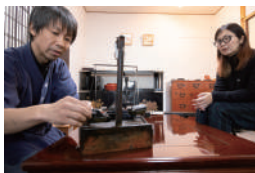
だった。天理教神殿の前でお渡りがあり、撮影スポットになっているのも、お渡りの後ろをついていくような形で地域の神輿が発するの不思議な風景に見えた。天理大学附属天理参考館では学芸員さんによる解説もいただいた。布留遺跡で見つかった円筒植輪は、古いスタイルをレースのように穴が開いているが、新しい時代につくられているらしい。サイカチの話もしてみたが、方角を気にし始めたのは平安時代から、という見解だった。

11月4日(火) 墨(錦光園)、天理市表敬訪問

錦光園 にぎり墨体験。早朝は山の寒さがツンとくる。寒いけれど心地よい。錦光園さんへ8時の約束で訪れた。奈良の町屋の手入れの行き届いた佇まい。中に入ると意外にも墨の匂いはしなかった。実家の方がよっぽど墨っぽい匂いがする。その答えは後で知る。

煤の集め方、松煙、油煙、カーボンへの移り変わりや違いを聞いた。松の木を燃やすと煤の粒子にばらつきが出るという。油やカーボンは粒子が細かく均一で、見るからに黒が深い。紙に載せた時も色に違いが出る。墨を擦っても擦っても墨汁のような黒にならないと思っていたが、それは墨の個性によるものだと知った。年月を経ると膠も枯れ、接着力が弱まってくるらしい。

墨は煤と膠で成り立つものだが、独特な膠の匂いを和らげるため、香りをつけるという。この香りが私はずっと墨の匂いだと思っていたものだった。墨をすると香りが開くらしい。香りは樟脳が主に使われるが、麝香(じゃこう)など色んな香りを練り込むことができるそう。膠と煤を混ぜたものを型の大きさに合わせて計り取り、練って空気を抜き、丸めてから伸ばす。体験したのがうまくいかないので手直してもらった。ヒビがあると、乾いた時にそのまま割れの原因になるらしい。型にはめた墨を取り出すと、いろいろの様だった。私は手に載せてもらって、ぎゅっと握り、「握り墨」という形にする体験をした。この後、デザイナーの刀根さんが作品のネガポジを意識したようなデザイン案を見せてくれたが、まさにこの「にぎり墨」も手の



撮影：麥生田兵吾



撮影：麥生田兵吾



撮影：菱生田兵吾

形の空の部分が形になって見えてきて、見えてなかった部分が可視化されることが面白いし、ほんのり温もりがあるのも愛おしい。こちらは桐箱に入れて持ち帰り、3ヶ月開けないこと、と念押しがあった。桐箱に入れることで、乾燥は早まるらしい。本来は2年かけて乾燥させるという。ただ乾燥させるのではなく、2年置くことで膠の接着力が程よく弱まるとのこと。2年でやっと思える墨になる。そして古ければいいというものでもない。使い手の好みによる。墨作りは、湿度が低い冬の仕事だと言う。風に当たるとひび割れしやすくなるので、寒くて風の少ない盆地の奈良は墨づくりに適した環境なのだそう。早朝の空気の冷たさを思い出す。風土と生業が美しく響き合っていると思った。しかし、日本に9軒しかないという墨屋。その8軒が奈良にあると言う。



撮影：Gallery PARC

11月6日(木) 呉竹工場見学

呉竹訪問。墨の工場の見学と、墨の体験。若く優しい雰囲気の社長に、書道具マニアの常務、工場長、一瞥もくれず作業に集中する彫り師、訪問者慣れた職人、工場といいながら、ほぼ昔から変わらない方法で作られる墨。良い意味で大手企業の裏切りがあった。筆ペンのイメージが強く、現代的な開発と経営の企業だと思っていた。時代のニーズに合わせながらも、しっかりと土台があり、多くの書家からも頼りになるパートナーとして存在している感じがした。一方、伝統というところでは、どこまで続くのか心配になる部分もあった。松煤を作っていた最後の一人は廃業してしまったらしい。将来に向けた在庫の確保は出来ているらしいが、「淡墨の最適な状態が作ってから50年」の世界では一瞬のように思える。父から与えられた墨が古梅園の「紅花墨」通称「お花墨」と言うこともわかった。持っていたのは5つ丸がついており、上等なものであることがわかった。

帰ってから気づいたが、一番よく使っているものは呉竹の墨かも知れない。持っていけば良かった。



撮影：Gallery PARC

11月7日(金)

朝からセミナールーム利用者など見学が2組。

午後は少し墨を使ってみる。錦光園の墨はすぐ黒くなる。字を書くのに良さそう。色々試してみようと思う。呉竹からもらったグラファイトの顔彩がとても良い。画用紙と相性が良さそう。これからもっと使うかも知れない。1000円くらいらしい。呉竹のペンも使いやすい。書道具は工芸の側面があるけれど、筆ペンなど他の画材は文房具の魅力があって「使ってみたい、使いたい」と思わせる。画材・文房具は本当に沼。

11月8日(土)

ヒエ塚古墳、クラ塚古墳、マバカ古墳、波多子塚古墳、山辺の道。

11月9日(日)

墨絵制作。昨日山辺の道を歩いたのが良い成果だったと思う。和歌山から友人が来た。

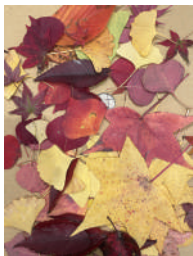


11月10日(月)

墨絵制作。昨日の続き。墨の違いを学んだことで、今日選ぶ墨の理由がわかる。結局いつもの墨だけど。

11月12日(水)

スタジオ302のパーティションを開ける。空間の把握を試みる。ほぼ1日、空いた部屋を見つめるだけの作業。とても大事な作業。



11月13日(木)

ワークショップ用の落ち葉を拾いに。銀杏並木沿いに、モミジバフウ。天理駅の方まで行ったがイロハモミジはあまり見かけなかった。多くあったのは、ナンキンハゼ。錦光園でいただいた墨と、長く使っている呉竹の古い墨を使い分けて描いてみる。色が全然違う。錦光園の墨は濃い色が出やすく、力強い線を出したい時に良さそう。呉竹は薄墨にした時に深みが出るように思う。呉竹で見た不染鉄の作品を思い出す。一つの画面の中に3種の墨が使われていた。筋目描きの波の絵も凄かった。

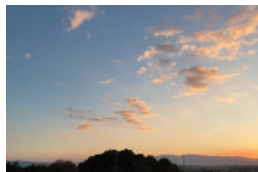


11月14日(金)

窓を開けて空気の入替え。気候も良く、気持ちいい。風を通すという当たり前のことが、身体に正しいような気がした。切り絵下書き。抄る。室生寺の勧請縄をモデルに描く。龍を模したものだと言ったが、描きながらこれは滝だと思った。誰がはじめに作ったものかわからないが、すごい造形だと思う。

11月15日(土)

墨の保存性について。父からも「墨は色褪せない」と聞いていたことを思い出す。紙に書くから儂いのだ。水に浸かった状態の木簡は腐らず残り、考古学の研究所でも保存水に浸した状態で保管されているような話を聞いたような気がする。木簡に「昨日の黒」「Yesterday's Black」と書いて保存してみたい。もしくは、どこぞの池に投げ込み、2000年後に発見されたい。



11月16日(日) 天理市主催ワークショップ、「平安時代の蓮弁を彫ってみよう」ワークショップ参加

文化村で天理市主催ワークショップ。楽しんでもらえたようで良かった。東さんに木簡を投げ込んでほしい池を探してもらおうお願いをした。午後は撮影。



11月18日(火)

多摩美術大学の職員さんとアーティストさんがいらっしやった。レジデンスプログラムに興味を持っていらっしや、学生さんにも紹介したいとのこと。国内だろうと今いるテリトリー外に飛び出すのは勇気のいること。私が学生だった頃を思い出す。海外で学びたかったけど、誰に聞けばいいかもわからなかったし、ネット情報もない時代。アーティスト・イン・レジデンスの存在も知らなかった。いつも無知ゆえにすぐ遠回り活動しているけど、新しい世界に触れる喜びは何にも代え難い。とりあえず、ここで制作できている今が嬉しい楽しい。このプログラムが終わったら、またスタジオのない生活に戻ってしまうな。困ったな！奈良県立橿原考古学研究所の岡見さんに木簡について質問する。墨の研究もされているとのこと、電子顕微鏡で見れば、炭と墨の違いがわかるらしい。木簡はメモとして使い捨てられたもので、記録文書とは用途意図が違う。歴史を記したものは書き手の都合で嘘があるが、木簡にはそれがない。木簡には真実がある。残すために書かれたものと、残ってしまったもの。「残す」「残る」言葉にするとわずかな違いだけど、岡見さんにとっては全く違うものだ。木簡を未来に残すプロジェクトも、意図的に残そうとするブラコン型と、なり行きに任せる、ため池放り込み型に分けるアイデアが明確になりそう。

墨が日本に渡ったのは飛鳥時代と考えているそう。高松塚古墳で「主線は墨だと思う」と職員さんがおっしゃっていたが、分析がまだだからとのこと。線のタッチなどを見ると墨と考えられると岡見さん。墨以前はマンガンなど鉱物系顔料が使われていたようだ。

また、区画整理、方角について風水的な意識が取り入れられたのも飛鳥時代後期と考えられるそう。それまで、街のつくりは適当だったらしいが、藤原京などは碁盤の目がはっきりしてくる。太陽を基準にしたのか、羅針盤のようなものがあつたのか、まだわからないが、時代によってずれがあるのは、時代によって地軸が変わってきたからなのだろう。風水の話になったので、サイカチの話もしておいた。

この日、文化村の吉田さんが、竈門神社の再会の木(サイカチ)について教えてくれた。鬼滅の刃で有名な神社だが、古くは太宰府政庁の鬼門除けとして「方避け」「厄除け」の信仰があったという。HPより「その昔、神功皇后が宝満山頂に植えられ、親しい人々との再会を祈願したと伝えられる再会(サイカチ)の木。(略)宝満山の頂上近くには再会の木の巨木があり、人々を見守るように佇んでいます。」今も頂上にサイカチの木があるらしい。宝満山(竈門山)は京都で言えば比叡山のようなものだろうか。鬼滅の刃の作者は歴史をよく勉強してあの漫画を書いたと言われているので、鬼門除けの神社の名前を主人公につけたのは狙ったことのように思う。

木簡の話に戻ると、中国では竹簡がよく使われているが、日本には元々竹はないので、木簡なのだそう。竹は時代が新しいと言うので、いつ日本に入ってきたのか聞くと「古墳時代」という。古墳時代=新しい時代。「昔」とは何なのか、月日の流れの認識の齟齬が面白く楽しい。



11月22日(土)

池の許可が降りなかった。悲しい。

11月23日(日)

曾大根のサイカチ、御所のサイカチを見に行った。どちらも龍神が祀られていて、川のほとりにあった。御所は江戸の街並みが残る、歴史的景観地区だった。フレンチレストランなどもあって、岡見さんおすすめの「風の森」の酒蔵もある。観光地としてレベルが高い。橿原の巨大無印に立ち寄った。噂の無印を見に来たつもりだったけれど、巨大な無印も敷地の一部でしかなく、もはや一帯がイオンの城だった。幹線道路を跨いで、イオンとイオンを結ぶ駐車場用の連絡橋がある。駐車料金もかからない。見えない殿様を囲むSP城下町のような感じだった。美術館とかギャラリーもつくってしまえばいいと思う。



11月28日(金)

パネルが届いたので、シーラー、ヤスリがけ、鳥の子カット。



12月3日(水)

呉竹からいただいた藍の墨を使ってみる。パネル張りを進める。ぐっと墨の色が深まるのがいい。綺麗に仕上がるといいな。

12月4日(木)

切り絵は空間に持ち上がった瞬間に見え方がまったく変わる。その驚きの感覚は裏打ちされたら全然違って見える墨絵と似ているかも。

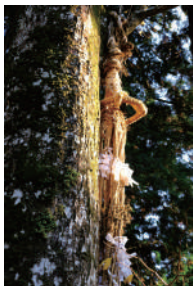


12月5日(金)

やりきりました。

12月7日(日)

奈良県立大学の風間先生とお話できた。地域の人と協働してみたいことはあるか、と聞かれた。小さなことではあるが、今回の展示については、墨で名前を書くことをお願いしている。名前の由来を話す人、緊張する人、孫に筆の使い方を教える人。何かのスイッチのようなものになればいいと思う。古墳マニアのお客様から龍穴神社は必ず奥宮まで行くように言われる。



12月8日(月) 龍穴神社、室生寺、大野寺磨崖仏

作品の参考にした勧請縄を再び見に行く。龍を模したという縄だが、現代人が描く龍とは違う。しかし、それが概念であることを念頭において、もう一度見ると、水そのものに見えてくる。今日は水の気配を気かけながら改めて宇陀へ赴く。奈良には、木簡のように、意図的に残そうとしたものよりも、「偶然残ったもの」に出会うことが多い。宇陀には変わらず人の心を動かす景観や自然の造形、そして信仰を感じる。川から続く参道を通って、鳥居をくぐる。風が吹き抜ける。想像のスケールを超えた岩山や、巨大な杉の木など、普段街で暮らしている自分には本当に驚くような景色が、山奥とは言え、少なからず現地の人々の暮らしと共にあることが、感動的ですからある。見えないものとの付き合い方をナチュラルにこなしている。文化村の職員が「早崎さん、座敷童もう見ました？」と当然のように、唐突に聞いてくる。ホテルから、関連施設に伝達事項としてミーティングで共有されているらしい。折り紙好きの半パンの男の子が話しかけてくるらしい。確かに会話しているのに、監視カメラには映らない。まだ開館して4年ほどの施設である。噂話ではなく、真剣な共有事項として、座敷童が存在する地域である。



12月12日(金) 初瀬小学校ワークショップ

小学校ワークショップ。日差しには恵まれなかったけど、素敵な6年生たちと一緒に制作できて、とても楽しかった！いい学校。

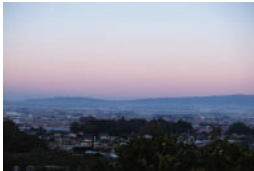
差し出がましいことだとは思ったけれど、ダンボールでツリーを作って交流ラウンジに勝手に置いてみた。受付の女の子に、組み立てを手伝ってもらった。かなりお客様が少ない日だったので、少し動くことが嬉しそうだった。申し訳ない。



撮影：Gallery PARC

12月14日(日)

東京藝術大学の西尾先生にお越しいただいた。丁寧に話を聞いていただき、とても嬉しい。風間先生も西尾先生もアートに関わりの少ない地域の人のためのアートを考えて活動している感じがする。テキスタイルと相性が良さそう、と言ってくれました。タンポポリバーシキットや、ターポリンを再利用したトートバックを見ていただきました。私はまだ誰かと一緒に作品を作る、という活動はほぼしたことがないが、タンポポの作品は、自分のコントロール下から作品の続きを手放すことで発展させることを考えてみた。その話を聞いてもらえたのは良かった。夜は文化村のスタッフさんが集まってくれてボードゲ会を開催。タンポポの双六を体験してもらった。ありがたい。



12月16日(火)

天気が良く、朝焼けも美しかった。山があるので、麓のコフニアにはなかなか太陽が顔を出さないが、西の山と空がピンクに染まりながら明けていく。光が届く前に朝ごはん前の準備で部屋に戻ったが、朝食時に中庭を見ていると、陽が差し始め、当たり前のことなのかもしれないけれど、やっとここにも光が届いたことに、感動した。友人親子が来て少しだけ一緒に文化財修復展示棟を見学した。ちょうど裏打ちをしている様子が見れて、私には絶対無理な方法でやっていたので、ただただ感心するばかり。

お客様の人数は少なかったが、箱作りはなかなか進まない。明日は3つくらいは作りたいな。



12月18日(木)

奈良県立美術館の山本さんが墨が画面上に存在させる奥行きについてお話していただきました。遠近法で描くことではなく、素材が生み出すものについて。

12月21日(月)

最終日、友人がたくさん来てくれて嬉しかった。報告会のようなことを関東でできるといいなと思う。

友人が、墨があることで、切り絵の黒の裏付けができていっているとってくれた。ぐるぐる周り道しながらでも登ってあげればいい。

墨、自分なりの方法で続けていこう。

12月22日(月)

インタビューでは言いたいことがうまく言えなかったように思うけれど、編集で短くしてもらおう。

ホールで全体が見えた時に、あまりに大きく見えて驚いた。たたむとあまりにも小さくて、自分でもびっくりする。平置きした時と立ち上げた時の違いは、墨で画仙紙に描いただけの時と裏打ちした時のパリッと色の深度も上がる感じ、似ているような気がする。

今日はみなさんが盛り上げながら撮ってくれて本当にありがたかった。奈良で得たつながりがまたどこかで実になるといいな。

ありがとうございました。





インタビュー

(2025年12月22日)

—— 現在のおもな活動はどのようなものですか？

現在、東京を拠点としながら、近年は地方での芸術祭やレジデンスなどに参加し、リサーチを作品に反映・発表することが続いています。以前にも東京で見つけたサイカチという木を出発点に、群馬の中之条町でリサーチ・発表したことがありますし、これは奈良に来てからも続けています。こうした取り組みだけでなく、普段の生活の中で気になるなと思ったことは積極的に調べています。

—— 早崎さんのステートメントに「自然と人間の間に現れる曖昧な領域に着目し」とありますが、これはどのようなものですか？

「人の眼差しから見る自然」への興味といったもので、ナチュラルな自然というよりも人間の視点を介した「自然」にこそ人間そのものの考え方が反映されているんじゃないかと思っています。そこから自然をモチーフに題材を探すことが多いのですが、結局は「私たちとはどういうものか」を考えるきっかけを探しているのかなと思っています。

——「切り絵」もまた「曖昧な存在」と捉えられているとのことですが、それはどのようなことですか？

子供の頃から「切り絵」は好きでずっと続けていて、「絵のひとつ」として捉えていたんです。ただ、ある時から切り絵が、絵でありながらも二次元と三次元のあいだの「曖昧な存在」であるという感覚を持って、より面白い展開が出来るんじゃないかと思ったのが切り絵を長く続けている理由かもしれません。例えば日々の物事も白黒はっきりと別れているものはありません。生と死、善と悪などの二つの言葉で二元的に表されるものでも、近づけば近づくほどその境界は曖昧になっていきます。つまり人の手で分類されるもの間にはいつも曖昧さが漂っていて、そういったものが気になってしまいます。そして、そういった曖昧なものが作品の形として表れてくれるんじゃないかと思っていて、私が考えていることとつくっているものが重なる部分であると感じています。

——今回、奈良でのAIRに関心を持たれたきっかけは何ですか？

関西出身ということもあって奈良という土地には親近感もあり、歴史にも興味があるためよく訪れていた好きな場所でもあったんで

す。また、ちょうど「墨」について改めて興味を持ち始めたタイミングだったので、奈良でのAIRの募集を見つけた時には「これはチャンスだ」と思って応募しました。

——そうした興味から奈良でのリサーチに取り組まれたと思いますが、実際にはそれほどのような発見がありましたか？

奈良には山の緑豊かな風景の中にぼこっと古墳があったり、同じ木が同じように植わっているはずなのに、ちょっと違和感を感じる風景があったりして、そこに自然と人工が曖昧に重なっているんじゃないかと思っていましたが、実際には想像よりもさらに人の営みと自然が近くにあつて、そういった新たな発見や気づきが今回の作品にも表れていると思います。

墨については、父が書道をやっていた関係で子供の頃から身近にありました。京都の大学で日本画を学んだ時には、そこまで墨を使うことはありませんでしたが、鉛筆やペンなどと同じくドローイングの画材の一つとして常に側にはありました。こうしたドローイングが溜まっていった時に、墨のドローイングを「残しておいた方がいい」と仰ってくださった方がいたりして、もう少しちゃんと取り組もうかなと思ったのが数年前です。大きなきっかけになったのが、

2023年の中之条ビエンナーレの出品作品の制作時です。その時は切り絵作品(160×160cmくらいのサイズ)の下絵の草稿として、墨でなるべく大きく描きながら全体の形を決めようとしていました。そうやって描いたものの中から最終的には逆光の障子越しに影が映るような線を描き、インスタレーション作品の一部となるように展開したのが大きなきっかけになりました。これから墨をもう少し意識的に使ったドローイングに取り組んでみようと思ったのですが、同時に墨について何も知らないということにも気づきました。今回はリサーチの一環として、幸運にも2軒の墨の工房見学をさせていただき、それぞれの墨づくりのお話を聞いたのがとても大きな収穫になりました。そこで教えてもらったことが、自分の扱っている墨を理解する学びになりましたし、そこから墨を使うということによる表現の幅も以前よりも広がったと思います。

—— 墨による一連のドローイング《黒の系譜／Lineages of Black》はどのような作品ですか？

今回は特に古墳がある景色に興味を持って、そこを中心に山歩きをしました。観光で歩くのと違い、自分が何に興味を持っているのか意識をしながら歩くと、違うものが見えてくるのがすごく良い経

験になりました。古いお墓でありながらも、現在を生きている人と共にあるという古墳の在り方が本当にユニークで、それは予想や期待を大きく裏切ってくるものでした。また、1000年続く地に立ちながら、現代の自分たちの生活の1000年後の未来がどうなるのだろうかという想像が膨らむものでもありました。

—— それぞれの描き方や画材の扱いの違いはどのような理由からですか？

画材の違いとして、鉛筆だと細い線をどうやって広げていくかという描き方になるんですが、墨はとても滲む素材なので、大きく描くことができます。しかし同時に細かい部分は省略されるので、筆では大きな印象から描き出してそこに自分が描き留めたいディテールを加えていく描き方になります。今回の作品はどれも景色を具体的に描いているのですが、必ずしも具体的にものが見えなくても良くて、とある石室(図1)を描いた作品《闕(しきい)の光／Threshold Light 》【p28】では、何か印象的なものが伝われば良いなと思ってぐっと描き込みを減らしたりもしています。逆にもう少し私が見えていたものを描きたいと思った部分は加筆しています。

——今回に制作・発表された切り絵作品《万物流転／Flux》
【p22】はどのような作品ですか？

リサーチで山や里などを歩いていると、特に大きな川があるわけではないにも関わらず「水」が全てを繋げているようなイメージがありました。そんな中で室生寺に行った時、大きな銀杏の木から垂れさがってる勸請縄を見つけて、なぜかとても気になりました。後から調べてみるとそれは「龍」の姿を模しているという話でしたが、その勸請縄が龍の姿というだけではなく、水そのものを表しているんじゃないか、そこからさらにこの勸請縄は滝なのではないかとも思いました。

滝というものは常に水が流れていて、一瞬たりとも同じ滝ということはない「変化し続けながらそこに存在するもの」です。私は自分が感じていた「水の存在」をどう表したらいいのか考えていたのですが、この勸請縄もきっと何百年も前から続いている水の表し方なんじゃないかと思って、そこからこの姿を借りながら滝という表現をしようかなと思いました。



図1：慶運寺裏古墳

——切り絵とドローイングの制作上の共通点や違い、関係性はどのようなものですか？

切り絵については時間をかけて作業をする部分が多く、ぼんやりしたもの或少しずつクリアにしていく時間が取れるものです。反対にドローイングは無意識的だったり直感的だったり、いろいろな作品の現れ方を試すことができ、どちらも必要なのかなと思います。特に切り絵の作品で表そうとしていた「二次元と三次元のあいだに漂う」ということは、もしかしたら墨のドローイングの方が直感的に伝えられる部分があるかもしれないと思いました。

——《昨日の黒／Yesterday's Black》【p21】はどのような作品ですか？

私もそうなのですが、多くの人が過去の歴史に惹かれて奈良を訪れると思います。ただ、しばらく滞在するうちに、私はこの先の奈良がどうなっていくのかと考えることがありました。たとえば大阪や東京は戦争などでいろいろな事が断ち切られてしまったこともあると思うのですが、奈良にいと1000年前からずっと昨日・今日・

明日という日常が続いていて、それはこれからもずっと続いていく予感があったんです。

これは木簡風の作品ですが、墨という素材は保存性の高い描画材で、日本では1000年以上前、中国では2000年以上前に書かれた墨の文字が見つかった実績があります。では、1000年以上残った実績のある木簡という姿で、今度は1000年後、2000年後の人が偶然この木簡を発見したら……と想像した時に、奈良に流れる時間の感覚、良い意味での違和感のような感覚を1000年先、2000年先の人に起こしてみたいという気持ちがあって《昨日の黒》というタイトルをつけました。2000年先の人が「昨日の」という言葉を見つけた時に「約2000年前の、その昨日」という不思議な時間の感覚を起こしたいなと思ってこの作品が出来ました。

——リサーチを通じて特に印象に残っていることにはどのようなものがありますか？

古墳については実際にいろいろな場所を歩いてみて、天皇陵のようにキチンと管理されているものばかりではなくて、今は果樹園(図2)になっているような古墳だったり、生活の景色の中、生活の営みの真っ只中にあるものがたくさんあって、それによって人の営

みが重なる場所の面白さに気づくことが多くありました。

その中で1つ不思議と思ったのが、この作品《戻された円／Returned Circle》【p9】を取材した場所(図3)に行った時に見た景色なのですが、こんもりした雑木林の中の獣道のような道を登っていった先に、木が円形に植えられていた場所があって、その中心にこんもりとまた木が植えられていたんです。ここがどういう場所かと聞くと、昭和から平成にかけて発掘調査があった場所で「この植えられた木の下には石棺があるんですよ」と説明がありました。ただ、なぜこの木がこのように円形に植えられているのかという説明はなく、それはいわゆる現代人、わたしたちと同時代の人がこのように木を植えたいと考えたんだと思うんです。そして、その気持ちって一体何なんだろうと考えると凄くおもしろくて。それが遺跡となると変な手を加えてはいけなような気もします。同時にそれが、たとえ1000年以上前であろうとも、そこが誰かのお墓であるという意識もまた働いているのかなと感じました。そう思うとすごい不思議で愛おしいというか、ミステリーサークルみたいな感じがしました。ある意味まだ新しい場所なのですが、このような形で人の仕事みたいな何かが残っていくことは凄いことだと思います。



図2: 西山塚古墳



図3: 中山大塚古墳

——奈良でのAIRを通じて得たこと、感じたことにはどのようなものがありますか？

私は日常の中にある物事を掘り下げていくと、いろいろなものに辿り着くことに面白さを感じます。たとえば生まれた地を離れて暮らしていても、歴史や文化から切り離されているわけではない。そこにはどこかで脈々と繋がってきた人々の営みがあり、その端に自分がいる感覚があります。そうして、これまでのいろいろな地での制作を経て、現時点でたどり着いた場所というのが奈良なんじゃないかなと感じています。「水」にしても、いつも飲んでいる水道の水とか手を洗う時の水。そういったものをどンドン辿って行くと、やがて奈良にきた、みたいな。

サイカチのリサーチにしても、埋立地である東京の湾岸エリアでサイカチの木を発見したのを発端に、そこから東京の内陸の方に、さらには群馬の中之条に行ってエリアを拡げたり。中之条では鬼門除けに立っているサイカチに出会い、そこから今度は京都での展示をきっかけに、京都の皂莢町(さいかちちょう)というところに辿り着き。その場所は平安京の初期の大内裏の位置とその鬼門と関係するんじゃないかという興味関心から、じゃあ京都に都が移る前の奈良だったらどうなっていたんだろうとか……。

こうやってグルグルと巡っていった現時点での終着の場所がまた

奈良であり、いろいろな物事の一つの源みたいなものが奈良にあるんだなと感じることが多いです。そして、その一つがこの勸請縄であり、また墨なんだと思います。



インタビュー全編 [動画]

アーティスト プロフィール

早崎 真奈美：HAYASAKI MANAMI

自然科学や生物の生態系に人間がどのような眼差しを向けてきたかということに関心を持ち、「生と死」「善と悪」などの二元性を通して人間の本质を見つめています。科学的に整った体系の中にも矛盾や微細なエラーが潜み、そこに人間特有のエゴや偏見が現れると感じています。主な手法は、黒い紙を用いた切り絵のインスタレーションです。切り出された紙片は平面でありながら空間に影を落とし、二次元と三次元のあいだを揺らぐ存在となります。近年は墨によるドローイングも取り入れ、そこに生まれる濃淡を通して境界がにじむ様子、つまり「曖昧さ」や「揺らぎ」を観察し探っています。

奈良は日本文化の精神性の根源を感じる地であり、古墳や山辺の道など、人の営みと自然が重なり合う景観に強く惹かれます。滞在制作では、そうした文化的風景をリサーチし、自然と人工、過去と現在が交差する場所に潜む人間の痕跡を作品として可視化したいと考えています。



大阪府出身

2007年 ロンドン芸術大学・チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン、BAファインアート 卒業

2003年 京都市立芸術大学美術学部日本画科 卒業

2022年「TOKAS二国間交流事業プログラム(派遣)」アトリエ・モンディアル(スイス・バーゼル)、2019年「BankART AIR 2019」、BankART Station(横浜)のレジデンスプログラムに参加。「ATAMI ART GRANT 2024」(静岡・熱海)、「中之条ビエンナーレ2021/2023」(群馬・中之条)、「大地の芸術祭 越後妻有 2022」(新潟・津南)、「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2020」(兵庫・神戸)の芸術祭に出展している。

主な展覧会として

2025年「カイロスとクロノスの狭間 或いは存在と痕跡の考察」The Terminal KYOTO(京都)

2025年 個展「Green Shadows, Against the Wind」VIENTO ARTS GALLERY(群馬・高崎)

2024年「In Praise of Shadows」Numero 51(イタリア・ミラノ)

2023年「誰かのシステムがめぐる時」TOKAS本郷(東京)

2021年「Slowly Arriving Atelier Mondial zu Gast」Kunsthau Baselland(スイス・バーゼル) など。

墨の記憶

渡辺 亜由美

「あなたにとって、黒はどんな意味なんだ？ 日本人として、何を表現したいんだ？」

早崎真奈美は、2000年代後半に留学していたロンドンで、こう問われたという。

1980年に大阪に生まれた早崎は、京都市立芸術大学で日本画を専攻したのちロンドン芸術大学へ留学。現在は東京を拠点とし、地方芸術祭や各地のレジデンスに参加しながら、土地のリサーチに基づく作品を発表してきた。これまで彼女が主要な表現技法としてきたのが、黒い紙を使った切り絵のインスタレーションである。自然／人間といった二元論で割り切れない入り組んだ関係に関心を持つ早崎にとって、二次元でもあり三次元でもある切り絵は、「あわい」を表現する上での最適なメディウムだった。

ところが奈良のレジデンスプログラムを通じ、早崎が向き合ったメディウムは墨だった。学生時代に日本画を学び、書道家の父を持つ早崎にとって、墨は気づけば傍にある素材だったという。

飛鳥時代に朝鮮半島や中国大陸からもたらされて以来、奈

良には1000年以上もの墨づくりの歴史が残る。植物油の煤でつくる奈良の油煙墨は日本の伝統的工芸品に指定されており、今も職人たちが手作業で墨をつくり続けている。早崎は、創業以来100年以上続く錦光園や、文房具の筆ペンでもなじみ深い呉竹といった製墨工房を訪れて、墨づくりの工程や歴史を学んでいった。職人たちと話をしたり、墨づくりを体験する中で、作家はいくつかの時間に触れることになったのだろう。ひとつが、墨に象徴される、土地に宿る大きな時間である。もうひとつは、彼女自身の個人史だ。

幼い頃に家の中を満たしていた墨の香りは、墨の原料となる膠の匂いを和らげるために練り込まれた香料のひとつだったこと。墨づくりはもともと冬の仕事だったこと。つくりたての墨はほのかに温かく、乾燥に本来は2年という時間を必要とすること。理想的な淡墨になるには、50年かかること。最後の松煙墨のつくり手が、廃業してしまったこと。奈良での滞在を通じて早崎は、墨の歴史と現実をひとつひとつ吸収しながら、家族の記憶とも結びつく墨に出会い直していった。

こうして約2か月間のリサーチを経たのち発表したのは、作家が「墨のドロイング」と呼ぶ作品群と、切り絵のインスタレーション、そして墨そのものだった。

複数のドロイングで構成された《黒の系譜／Lineages of Black》を見てみる。ひとつひとつ丁寧に、同時に大胆に置いた筆の痕跡や、技術と偶然とを融合させてつくり出す墨の滲み、そして余白が響き合い、見るものに大きなスケールを体感させる作品群である。これらの作品は、墓壙と石室の目印にと現在の人々が植えた木々が円環をなす様子や、ぼつんと水に浮かぶ古墳など、作家が目にした奈良の景色をもとに描かれた。なるほど確かに一定の距離を持って作品と対峙すると、木々や岩、水、茂みや丘の様子が見えてくる。ただし、絵の中に表れる像を掴むまでは少しの時間が必要だ。鑑賞者の眼の前にあるのは、墨と筆とが抽象化する絵画空間だからだ。

今回早崎は墨のリサーチと並行しながら、古道を歩き、古墳や遺跡、寺社をめぐる、遙か昔に生きた人々の営みを辿った。2020年代に生きる私たちとは異なる価値観に生きた人々の

痕跡が、1000年以上の時を経た現在も集落の中にあること。作家は複層的な時間が凝縮された墨を主役に、現在と過去、文明と自然といった人間の尺度を悠々と超えて現存する世界と、その世界に触れた作家自身の驚きを、好奇心と探究心を持って描き出した。

早崎が描く風景は、どれもが夢の中のような浮遊感を備えているが、同時に大地にどっしりと根を張った力強さも感じさせる。それは、地に足のついたリサーチと、自らの「なぜ」に真っ直ぐ向き合った作家自身の身体感覚が、作品に反映されているからだろう。作品が内包するこの身体感覚は、描く際の姿勢や視点にも起因しているように思える。早崎は伝統的な日本画同様、床に支持体となる紙を置き、身体と目線を地面に向けて描く。そして仕上がった作品を垂直方向に向けて一定の距離をとり、自身の絵と出会い直す作業を繰り返す。没入と観察という視点の往還を軸に、描く対象に応じて墨や筆の使い方をチューニングしていくことで、バリエーション豊かなドロイングを生み出すことに成功している。特に、太く堂々とした筆遣いによる縦長の作品

は鮮烈だ。前衛書や、フランツ・クラインの抽象絵画を想起させるこのアブストラクションが実は、古墳の中から外を覗いたときの景色だと知ると、白い余白は強烈な光となり、作家が見たであろう光の強さを追体験することができる。

今回、墨のドローイングと共に切り絵が展示されたことで明らかになったのは、描く対象や対象と向き合った際の自身の感覚を、扱う画材の性質を見極めながら抽象化していく早崎の手つきである。切り絵のインスタレーション《万物流転／Flux》は、室生寺の勧請縄をモチーフとした作品だ。この勧請縄は、室生川流域に古代から伝わる龍神信仰を表したものののだが、イチヨウの木から垂れ下がる様子を眼にした早崎は、「これは滝だ」と思い至ったという。水が天から地へと流れつくように、天井から床面へと垂直方向に設置された切り絵は、驚くほど緻密に細部が象られている。縄の目や、たわわに重なり影をつくる紙垂、ダイナミックな勧請縄自体のねじれが、三次元的な奥行きを持って表現されているのだ。ただし本作と実際の勧請縄を見比べると、作品の方が幾分も力強く複雑にねじれて絡み合い、暴れる龍

のような躍動感を持っていることに気づく。ここにおいても早崎は、対象を正確にうつすのではなく、作家にとってのリアリティを白と黒の世界で表象することに振り切っている。

素材と技法、コンセプトを調合し、理論を援用しながらオリジナルなナラティブをつくること。これはコンテンポラリー・アートの世界で戦う者にとっては、避けて通れない課題である。例えば黒い紙で切り絵表現を行う作家に、アメリカ出身のカラ・ウォーカーがいる。ウォーカーの作品において、黒という色彩、切り絵という手法、シルエットによる匿名性すべてに意味がある。作家が光を当てるのは、歴史の影に隠れた黒人たちや、女性たちの物語だからだ。それでは日本で生まれ育った早崎にとって、黒という色彩は一体何を意味し、どんなリアリティを持つのだろうか？ かつて答えられなかったという冒頭の問いの延長線にあるのが、墨、そして土地の歴史と個人の歴史とが交差する複層的で曖昧な時空間への信頼ではないだろうか。

自然科学や生物生態系に対する人間の眼差しに関心を持つと語る早崎だが、今回発表した作品にはどれも、人間の姿が

表れない。それゆえ現前化する「人間の眼差し」とは、早崎自身の眼差しである。そして抽象化の過程で対象から何を抽出して何を表現するかという視点と選択こそが、作家が引き受けるべき責任なのだ。

責任という意味において、会場に《昨日の黒／Yesterday's Black》と名付けられた墨そのものを置いたことは示唆的である。古くからの文化や建造物、風習が豊かに残る関西の中でも、1000年以上前の史跡が家々の近所にある奈良には、他の土地とはまた違った時間軸が息づいているように思える。それは人間の政治や武力、権力を基準にした時代区分ではなく、自然の移ろいと共にある一続きの時間である。作家は今回、かつて父親にもらったという古い墨を持参し、それらが450年以上続く老舗の墨工房でつくられたものだと知った。製造から数十年経過した現在、墨の状態はゆっくりと変化して、深みある黒を生む。何百年、何千年と続く土地の記憶と出会うことで、1人の人間の中に流れる時間が幾重にも膨らんでいくこと。数量では決して計測できないこの時間感覚こそが、幼い頃から早崎の内側

で育まれたリアリティであり、表現者として引き受けた責任なのではないだろうか。このとき、墨の黒は早崎の代弁者となる。

早崎の作品が今後どのような「グローバル・アートの言語」を獲得しうるのか、そもそもそうした言語が必要なのかは未知数だ。しかし、思考停止を促すポピュリズムや瞬間的なアテンション・エコノミーに長けた者が「勝ち」とされる今日において、それでも1000年、2000年という途方もない時間感覚に賭けてみる。この態度を通じて生まれた作品たちは、どれもが瑞々しく、そして満たされている。まずはこの点を確認し、冒頭の問いに戻る。

渡辺亜由美

京都国立近代美術館特定研究員。滋賀県立美術館学芸員(2014~2023年)を経て現職。専門・関心領域は、20世紀後半から同時代の美術表現。企画・担当した近年の展覧会は以下の通り。「ボイスオーバー回って遊ぶ声」(2021年、滋賀県立美術館)、「2025年度 第1回コレクション展 すわって、みる」(2025年、京都国立近代美術館 ※松山沙樹・渡川智子との共同企画)、「キュレトリアル・スタディーズ16 荒木悠 Reorienting-100年前に海を渡った作家たち」(2025年、京都国立近代美術館)。

審査委員による展覧会講評

西尾 美也 (美術家/東京藝術大学 准教授)

奈良で改めて出会い直した「墨」という素材が、本展の核となっている。千年残ると言われる墨は、現代の墨づくりでも「50年後が最も使いどき」とされるという。作家は奈良での滞在を通して、素材に内在する長い時間軸を身体的に理解し、その感覚が作品に深く染み込んでいる。

木簡は「残そうとして残されたものではない」という研究者の言葉も印象的だったという。レーザーカッターで何でも切れる時代に、あえて手で一枚の紙を切り抜き、作家の息遣いそのものを刻む切り絵の行為は、現代における「木簡的な残し方」の再提案とも言える。抽象的な墨の絵と、具体的でイラスト的でもある切り絵。その間に置かれた木簡には「昨日の黒」と英語で記され、千年後に向けて黒を手渡そうとする作家の姿勢がある。黒という色が、イメージと現実、過去・現在・未来をつなぐ橋渡しになっている。だからこそ、抽象も具体も文字も自由に横断しながら用いているのだろう。

こうした素材への眼差しや時間への意識は、そのまま成果展

の空間構成にも響いていた。成果展では、奈良での経験を墨の多様な筆致としてアーカイブしていく平面作品と、切り絵の新作が並んだ。和紙と墨、黒い紙とホワイトキューブがつくる、黒と白が交差する静謐な空間。長く残る墨の絵と、極めてフラジイルな切り絵作品との対比が際立っていた。切り絵をどのように残すか、展示するかを作家自身が試行錯誤していた点も興味深い。自然素材と工芸の手仕事への信頼と、そこに宿る時間感覚が作品に一貫して流れている。

切り絵はしばしば美術として軽視されてきた造形であり、墨表現もまた西洋絵画とは異なる文脈をもつ。作家はその親しみやすい工芸的表現を通じて鑑賞者を引き寄せながら、美術史の問い直しを静かに提案しているように見えた。過去作品ではボードゲームやすごろく、トートバッグなどへの展開も試みており、奈良滞在から生まれた作品群もまた、何かしらのプロダクトへ枝分かれし、ゆるやかに奈良の日常へ浸透していく未来を期待させる展示だった。

風間 勇助 (奈良県立大学 地域創造学部 講師)

早崎真奈美さんの展示《昨日の黒／Flux in Black》は、来場者の身体感覚に静かに働きかけることから始まっていました。受付に置かれた墨と筆で、芳名帳に名を書くという行為そのものが、本展への導入となっていたのです。久しく触れていなかった筆を握り、紙に滲む墨の感触を確かめると、なぜか身が引き締まるような緊張感を覚えます。しかし、多くの人が一度は触れたことのある、どこか懐かしさもある感覚でした。

本展において重要な素材である「墨」は、奈良においては奈良墨としてその歴史が深く、また地域の方々にとっても馴染みのあるものだと思います。しかし、意外なことにこれまでのレジデンス・アーティストには取り上げられてこなかった素材でもあり、今回、早崎さんに滞在いただいたことで、奈良の見慣れた風景や素材に対して、新たな価値を探ってくださったように思います。

早崎さんは本展に先立ち、奈良に点在する古墳をはじめ、「人の手が加わった痕跡を感じさせる風景」や「自然と人工が共存する場」をリサーチしてきたといいます。短期間ながらも精力的に各

地を巡り、その成果である本展を通して浮かび上がってくるのは、墨が内包する長大な時間軸と、古代から現代に至るまで生活のなかに古墳があり続けた奈良の歴史的風景とが重ね合わされていく感覚です。千年以上前の古文書が今日まで判読可能であるのは、墨の細かな粒子が紙に深く定着するためであり、また淡墨が理想的な状態に至るまでには50年を要するとも伺いました。

さらに、油彩などとは異なり、最初のストロークが消えることなく残り続ける墨の特性と向き合いながら、線そのものもつ緊張感や偶然性が探究されていたようにも感じられます。一度引かれた線は消えずに重なり合い、その過程で風景がおぼろげに立ち現れていく。墨のもつ黒の奥行きの中に、過去と現在、行為と記憶とが交差するさまが見えてくるようでした。

山本 雅美 (奈良県立美術館 学芸課長)

今年度の滞在アーティスト誘致交流事業で選出された早崎真奈美さんの成果発表展を訪ねたとき、会場に早崎さんがいらしたので、今回の滞在制作について、活動内容や感想をお聞きした。

展示では、本来取り組んでいた切り絵の技法を使った《万物流転／Flux》がギャラリーの奥の天井からつるされていた。これは滝の流れを表現したもので、常に変わっているがそこに存在するもののイメージを表現している。室生寺を訪ねてできたイメージである。

このほか、《昨日の黒／Yesterday's Black》、《黒の系譜／Lineages of Black》、《痕跡／Tracing》は今回の滞在の成果である墨を使った作品である。《昨日の黒／Yesterday's Black》は展覧会のタイトルでもある「昨日の黒」という言葉を冠する作品で、古代から伝わる奈良の墨を未来に手渡すコンセプトを示している。また《黒の系譜／Lineages of Black》は9点の絵画作品から構成されている。これらは、今回の奈良の滞在で

出会った墨を使用した作品群で、にじみやかすれなどの微妙な表現を駆使して、古墳や山辺の道の風景を描いたものである。《痕跡／Tracing》は墨と和紙を使ったユニークな試みで、墨が和紙の繊維に滲みこんで奥行きが表現され、絵画空間の豊さにつながっている作品である。

早崎さんは、古墳群を観察したり、墨の生産地のリサーチを行ったり、奈良に長期滞在ができるから取り組めたりリサーチを十分にしたという。応募書類で、日本の精神文化の源泉を奈良の歴史に求め、特になら歴史芸術文化村の近隣の石上神宮や山辺の道、古墳群などのへの憧憬があると書いてあったが、今回の滞在で十分に自身の好奇心を満たすことが出来ただろう。成果発表展を見ることで、今回の滞在アーティスト誘致交流事業として、早崎さんの奈良との出会いが幸福であったことを確認できた。

募集要項

なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」

令和4年度(2022年度)より開始したアーティスト・イン・レジデンス事業。奈良県が世界に誇る歴史・芸術・文化を肌で感じ、アーティストの新しい視点や切り口で活動を行い、なら歴史芸術文化村を拠点に制作活動を行う中で、人々が作品とふれ合うことで新しい感性を導き出し、交流することで地域の魅力を歴史や芸術と繋げて広く発信することを目的とする。

《募集要項》

- 招聘期間 [オリエンテーション期間] 2025年10月6日(月)～2025年10月19日(日)
[滞在期間] 2025年11月2日(日)～2025年12月24日(水)/53日間
[成果発表期間] 2025年12月6日(土)～2025年12月21日(日)/16日
 - 募集期間 2025年6月25日(水)～2025年8月15日(金)[必着]
 - 結果発表 2025年9月上旬頃
 - 主催 なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市)
 - 招聘人数 1名または1グループ
 - 支援内容 制作スタジオ・制作費45万円・往復交通費・宿泊費・記録集／記録映像制作
 - 制作場所 なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ301・302
 - 選考方法 提出された資料をもとに、地域の人々との関わり方や、芸術文化に対して地域の人々が興味を高める内容であるかなど、なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会 会長が委嘱した各審査委員の審査結果を参考に、主催者がアーティストを選考し、決定する。
-

《受入条件》

- ・現在活動している国内在住のアーティスト(表現者)であること(ジャンル不問)。
- ・18歳以上であること(令和7年4月1日時点)。
- ・地域の人々が芸術文化に関心を持つことができる活動を展開すること。
- ・地域の人々との交流や協働を通じた制作活動を行うこと。
- ・オリエンテーション期間は天理市、桜井市に滞在(宿泊)し、各地域案内等に参加すること(期間中2日程度を予定)。
- ・天理市地元小中学生等との交流会に参加、桜井市内でのワークショップを最低2回行うこと。
- ・主催者側で編成するワークチーム(地域とアーティストをつなぐ役割を担うサポーター)と、互いに協力しあい、制作活動を行うこと。
- ・滞在期間中、奈良県の魅力に触れ、フィールドワークを通じて地域の人々との交流を積極的に行い、制作すること。
- ・10月中旬から下旬にかけて(2週間を予定)文化村スタジオ内にてアーティストの紹介を行うため、相談に応じること。(過去作持参の場合などは輸送費の支給はなし)
- ・制作場所は公開されており、来訪者などが自由に見学できるようになっているため、開かれた環境下で制作を行うこと。
- ・滞り期間中に作品を制作し、主催者と協議の上で成果発表を行うこと。
- ・制作、生活について基本的にアーティスト自身で行うこと。
- ・日本語での意思疎通ができること。
- ・健康状態が良好であること。
- ・滞り前にZoomを利用したオンラインミーティングができること。

《招聘条件》

主催者とアーティストは、以下の条件について、覚書を約定する。招聘条件における主催者からの負担内容は、アーティストが単身で来県することを原則としたもので、基本的に同伴者は不可とし、1グループに対しても単身分の負担内容とする。

[1.来県に関する事項]

旅費

- ・主催者は期間中2回分の往復交通費を支給する。支払い時期は、アーティストが文化村に到着した後とする。
- ・上限は200,000円とし、上限を超える交通費はアーティストの負担とする。
- ・原則として、公共交通機関を利用し、居住地の最寄り駅から天理駅間の合理的かつ経済的な経路の鉄道等往復運賃を旅費とする。
- ・なお、車を利用する場合は奈良県の旅費規程に準ずる。

[2.制作、成果発表に関する事項]

制作費

- ・主催者は、制作活動に係る費用(調査費、材料費、設営費、撤収費を含む)として450,000円を支給する(源泉込み)。
- ・支払い時期はアーティストが文化村に到着後1週間以内とする。

制作場所

- ・なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3Fスタジオ301・302を基本使用し、希望がある場合は、主催者と協議した上で決定する。
- ・自身が必要とする機材、工具などは持参すること。
- ・制作現場の清掃は、アーティストの使用範囲内はアーティスト自身が行うこと。
- ・館内のWi-Fiを使用できるが、PC及び周辺機器の貸出しはしない。
- ・その他館内での規則などを守ること(作業可能時間は原則9時～20時、延長の場合は要相談)。

成果発表

- ・滞り期間中に成果発表を行うこと。展示や公演など成果発表の会期と会場については、2025年12月6日(土)～2025年12月21日(日)、なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3Fスタジオ301・302ほかとする。
- ・アーティストと来場者の交流を大切にしたいため、会期中はできる限り会場対応を行うこと(対応日数は相談に応じる)。

- ・設営や撤収の作業は原則としてアーティスト本人が行うこと(補助的作業については要相談)。
- ・成果発表期間中、メンテナンスが必要な場合は、アーティストが責任を持って行うこと。
- ・主催者は、成果発表に係る用品(キャプション、パネル等)はアーティストと協議の上、用意する。
- ・展覧会用チラシ制作に関しては、主催者のディレクションで制作を行う。
- ・アーティストは原則成果発表終了後、作品を自身で撤去しなければならない。作品を持ち帰る場合の梱包作業及び輸送費はアーティストの自己負担とする。
- ・主催者が記録した写真、映像等の著作権及び公益に資する広報宣伝のためにそれらを使用する権利は主催者に帰属する。主催者の了承を受けた者はこれら全てを無償で使用できるものとする。
- ・本事業で制作された作品の著作権と所有権は全てアーティストに帰属する。

[3.取材にかかる指示の遵守]

取材する場所、方法及び事前許可について、主催者から特段の指示がある場合、アーティストは必ずこれに従うこと。

[4.滞在生活に関する事項]

生活

- ・滞在中の生活費は支給しない。

宿泊

- ・宿泊費は7,700円/1泊(最大67泊)を上限として支給する。
- ・オリエンテーション期間に関しては、下記日程において主催者が指定する宿泊施設を利用し、地域案内等に参加すること。
天理市、桜井市に各4日間は滞在すること。希望があれば延長可能(各市最大1週間まで)期間:2025年10月6日(月)~2025年10月19日(日)(最大14日間)
- ・滞在学习、成果発表期間:2025年11月2日(日)~2025年12月24日(水)53日間

- ・その他の期間については主催者が宿泊先を紹介するが、紹介施設以外に宿泊することも可能。天理市内及び桜井市内の複数の宿泊先を紹介し、アーティストが決めることができる(ただし上限額を上回る場合は、アーティストの自己負担とする)。

保険

- ・傷害保険及び、健康保険等はアーティスト自身で加入すること。主催者は保険加入等に関する義務は負わない。
- ・移動手段として、電動自転車の利用(無料)が可能。自転車保険の加入は主催者側で行う。

[5.その他]

活動記録

- ・主催者は本事業の記録のため、記録集を作成する。
- ・主催者はアーティストの作品及び活動の記録を写真、映像で記録するため、アーティストは協力すること。なお、作成した記録集はアーティストにも提供できるものとする(上限100部)。
- ・動画編集、記録集制作に関してのディレクションは主催者とする。

マスコミ対応

- ・アーティストはマスコミ各社からの取材申し込みがある場合、可能な限り協力すること。制作に支障をきたしたり、プライバシーを侵害されたりする恐れがある場合は主催者に申し出、取材を断ることができる。

ワークチーム(サポーター)について

- ・滞在学习中はワークチームが、リサーチの手伝いや、地域とアーティストをつなぐ役割を担う。地域との取組みについては、アーティストとワークチームで検討し、活動すること。その他のサポート内容については、主催者と協議の上決定する。

自然災害、不可抗力等による対応について

- ・状況により、本事業の実施や継続が困難であると判断された場合、主催者とアーティストが状況に応じて協議し、その対応について決定する。

なら歴史芸術文化村について

なら歴史芸術文化村は、歴史、芸術、食と農など奈良県の誇る文化に触れることができる施設です。日本で初めてとなる文化財4分野（仏像等彫刻、絵画・書跡等、歴史的建造物、考古遺物）の修理作業現場の公開や、国内外から招いたアーティストとの交流、幼児向けアートプログラムなどを実施しています。

単に見学する、一方向の解説を聞くことだけで終わらず、専門家や他の参加者と対話しながら知的好奇心を広げて学びを深めるラーニングプログラムを実践。五感で感じ、様々な人と関わり、体験して、「なぜ?」という新たな問いを生み出すことを大切に、知を探求していく楽しさを提供していきます。



photo：衣笠名津美



なら歴史芸術文化村

<https://www3.pref.nara.jp/bunkamura/>
〒632-0032 奈良県天理市杣之内町437-3

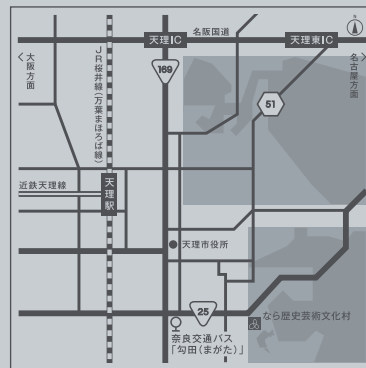
開館時間 | 9:00-17:00

交流にぎわい棟 9:00-18:00(月曜営業・レストランは20:00まで)

休館日 | 月曜日(祝日の場合は翌平日が休館)

アクセス | ● JR・近鉄天理駅より直通バス、直通デマンドシャトル運行(有料)

● 奈良交通バス「勾田」下車 徒歩15分 ● 無料駐車場あり



なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」
ドキュメント2025

Bunkamura AIR Document 2025

企画・編集 正木裕介 (Gallery PARC)、北村良子 (なら歴史芸術文化村)

執筆 早崎真奈美、渡辺亜由美、なら歴史芸術文化村

撮影 麥生田兵吾 (合同会社ウミアック) [表紙-表紙裏,裏表紙-裏表紙裏,p9-28,p51,p55,p57]
早崎真奈美 [p34-50, p59]

デザイン 安間仁美・刀根彰吾 (mondo)

印刷・製本 株式会社明新社

発行 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会

発行日 2026年3月

©2026 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会 無断転載・複製禁止



THE
GARDEN



なら歴史芸術文化村

